



学校法人
鎌倉女子大学

卒業生に贈る言葉 — 一隅を照らす、此れ則ち国宝なり！ —

若い頃は、あまり感激を覚えない言葉でした。私が生きる場所は、一隅などではない、世界が相手だ、と気負っていたからかも知れません。若気の至り、としかいいようがありませんが、ただいつの時代の青年たちにも、自分を誇大に考えるにせよ、貧小に捉えるにせよ、プラス・マイナス何がしかの虚勢がつきもので、今の私が昔の私を、そうかといって殊更に咎めようとは思いませんが。当時は当方で、精一杯であったこともまた、紛れもない事実なのであります。

しかし、自分の力の限界も、とうに見え透いて、一生で果たせる仕事の質量も、既に想像出来る齢になりました。そして、今、私の生きる場所は、そも「一隅」でしかないのだとつくづく思い当たります。というよりも、人間の生きる場所は、多少の程度差はあるにせよ、所詮は五十歩百歩、誰であっても一隅であり、人間に出来ることは、その一隅をわずかでも照らし、一隅を少しでもより善くすることでしかないのだと思います。神さまからか、仏さまからか、自然からか、何からか、それはともかくとして、少なくとも私たちに生きる一隅がこうして与えられている以上、そしてそこにこうして生かされている以上、私たちは、少なくともこの掛け替えのない一生を無為に過ごしてしまうのではなく、その一隅を自分なりに精一杯照らしたいものだと思えます。

私なら、この鎌倉女子大学という一隅において教育や研究という仕事を通して…。栄養士の方ならば、病院や施設での給食管理や栄養指導という仕事を通して…。警察官の方ならば、地域での治安保全や秩序維持という仕事を通して…。あるいは、主婦の方ならば、それぞれの家庭での家族への献身的な世話や日常的な支援、次世代の擁護や育成という、それこそ大変な広がりをもった尊い仕事を通して…。

この言葉は、言うまでもなく伝教大師最澄がその著『山家学生式』に書き残している言葉です。その名のごとく、清廉真摯で、無垢純真の生き方をした、如何にも最澄らしい、古今東西の箴言の中でもひと際輝く珠玉の名言です。この言葉ほど、人間と世界の本質的關係を一言をもって見事に、また何の気負いも銜いもなく、これほどの的確に言い当てた言葉を私は他に知りません。

唐の留学から帰った最澄は、政府直轄の官立寺院には飽き足らず、南都奈良から遠く離れて、琵琶湖の西の山中深くに、自分自身の思想と理想に基づく本格的な仏教修養の道場である根本中堂を開きました。一般には、日本最古の私立学校は、これに遅れること四十余年後、京都は東寺の敷地続きに、弘法大師空海によって開かれた綜芸種智院をもって嚆矢とされますが、ある意味ではわが国初の私立学校の発端は、この最澄の比叡山寺であったのかも知れません。

山家とは、この比叡山延暦寺のこと、乃至最澄自身のことを指します。学生とは、文字通り学生・生徒のこと。式とは、制度・法規といっても、精神・心得といってもいいでしょう。したがって、山家学生式とは、叡山に集まってきた自分の弟子たちのために最澄が書き贈った学生心得、教育指針、今風にいえば、敢えて「学生生活の手引き」といっても許されるのかも知れません。

自分自身については、「麈尾（※道を求めて出家した僧ではなく、単に衣食を得るために寺に入った僧のこと）の有情、底下の最澄」と徹底して断罪し、「生ける時、善を作さずんば、死する日、獄の薪とならん。」と厳しく戒めた最澄は、しかしさまざまな資質を背負った弟子たちに対しては、厳しさの中にも、誠に心優しく接した人でした。

その学生式の冒頭に、最澄は、こう書いています。「径寸十枚、是国宝に非ず。一隅を照らす。此れ則ち国宝なり。」と。つまり、見るも見事な、直径一寸にもなる大粒の宝珠、それがたとえどんなに多くあっても、しかしそんなものは、国の宝でも何でも無い、本当の意味で国の宝というものは、自分が生きる一隅を照らす人のことだ、そうした人こそ、国宝の名に真に値する、そう最澄は、学生たちに向かっていうのです。君たちも、そうした人間になっていってくれよ、最澄は、学生たちにそう説いているのです。この言葉は、能力の如何を問わず、どんな立場の人でも、決して気負うことなく平易に実践出来る何と素直な心得ではありませんか。

私たちは、直接的なかたちで広い世界に関わることは出来ません。どんなに頭のいい人であっても、先の先まで見通すことの出来る人などおりません。どんなに優れた人であっても、全てのことに関わることの出来る人などおりません。稀代の論理家・田辺元先生風にロジカルに整理していうなら、私たち一人ひとりという個別的な存在、即ち個は、それぞれの生きる特殊な状況、それぞれの果たすべき特殊な役割、即ち種を通してしか、普遍的世界、即ち類に関わることは出来ないのです。しかし、一人ひとりがそれぞれの生きる場面において自分自身の務めを真摯に果たしていくことこそが、そうした人間が一人でも多く世の中に輩出されていくことこそが、結果として世界が一步一步より善くなっていくということなのです。歴史を動かすのは、いつの時代でも、一隅を照らす個人の努力であり、世界は、そうした一人ひとりの真摯な貢献によってしか決してより善くなってはいかないものなのです。学祖・生太先生がおっしゃった「感謝と奉仕に生きる人」とは、そのような「一隅を照らす人」のことだと私には思えます。

卒業、おめでとうございます。長い一生、身体に気をつけて。皆さんのご多幸とご活躍を祈ります。

[>前のページへ戻る](#)